

第二回「はなやすり出版文化を考える会」資料

日時：2024年6月29日（土）

場所：名古屋国際会議場 433 会議室

テーマ

文学者を知る 1 「藤井達吉」、2 「いわさきちひろ」

「本の制作と販売について～子ども向けの絵本、大人のための子どもの本」

資料作成 相地 透

<文学者を知る1「藤井達吉」>

1 基本情報

- ・工芸家、図案家。
- ・1881（明治14）年生、1964（昭和39）年没。
- ・現在の碧南市に生まれる。
- ・小学校卒業後、現在の常滑市大野にあった木綿問屋に奉公に入る。仕事で朝鮮や台湾などに渡航した後、17歳のときに、名古屋の七宝店に入社。入社後は、仕事の関係で、大阪、奈良、アメリカのオレゴンなどに行く機会があり、古美術や西洋・東洋の美術に触れる。24歳で退社し、美術工芸の道を歩み始める。29歳で家族とともに上京。東京では、上野、渋谷、大井町などで暮らしながら、工芸家として知られるようになっていく。
- ・戦後、疎開先の小原村で総合芸術研究会を創設。小原和紙を用いた美術工芸品の制作・普及に努め、工芸家を育成する。現在の愛知県美術館の前身となる愛知県文化会館美術館の開館に関わる。晩年は、碧南、沼津、半田、岡崎、湯河原など生活場所を頻繁に移す。この間、四国で遍路の旅もたびたび行っている。1967年、岡崎市民病院にて心臓発作で亡くなる。

2 重要である理由

- ・小原村に疎開したことをきっかけに、終戦後、小原総合芸術研究会を創設。芸術家を育成した。そのときに話していたのが、よく自然を観察すること。
- ・藤井達吉が残した作品は、多岐にわたる。屏風絵、漆絵、天井絵、着物、盆、皿、小箱、鉢、茶碗、札入、継色紙など。その図案は自然のモチーフが取り入れられている。自分の身の周りにある草花や木々、風景をよく観察していたことが、作品から見てとれる。
- ・家庭での手芸普及に尽力する。写生にもとづいて、自由に図案を書く、という方針をとっていた。身近な自然に目を向けて、自分が日々使うものに刺繍をしたりすることで芸術を身近なものにすることを勧めた。「芸術そのものはもともと人間の実生活すなわち家庭生活から、縁も由縁もない天と地ほどかけ離れているものではありません。もし人がほんとうに自然を愛し、雲の形にも木の葉の恰好にも、あるいは動物の姿勢に対しても、真に打ち開いた懐かしい心をもって見るならば、そこに自然と自分との間にいうべからざる情緒が流れてきます。これが芸術の芽生えで、この心でもって周囲を見てゆけば、だんだん自分の生活の中に芸術を取り入れることができますと思います」（家庭手芸品の製作法）
- ・出版社アルス発行、「アルス婦人講座」に図案を出している。

3 ゆかりの土地

- ・豊田市小原……1945年に疎開した場所。この小原村に滞在したことがきっかけで芸術研究会を発足する。戦後、小原和紙を用いた工芸を発展させる。現在、小原和紙のふるさととして美術館、体験館がある。
- ・碧南市……出生地であるとともに、上京、疎開を経て1950年から6年間、碧南で過ごしている。現在、碧南市藤井達吉現代美術館がある。
- ・真鶴町……上京後、大井町に住んでいたが、1935年から神奈川の真鶴岬に移住。2年後には工房を立てる。小原村に疎開するまで生活の場だったようだが、滞在時の詳細は不明。

4 参考文献や資料など

- ・「藤井達吉の全貌—野に咲く工芸 宙を見る絵画」展図録（2013）
- ・「素人のための手芸図案の描き方 附録応用図案百種」（主婦の友社／1926）
- ・「藤井達吉随筆集」（若子旭編／1980）

<文学者を知る2 「いわさきちひろ」>

1 基本情報

- ・画家、絵本作家。
- ・1918（大正7）年生、1974（昭和49）年没。
- ・現在の越前市に生まれる。生涯、子どもの幸せと平和をテーマとした。

2 重要である理由

・文芸誌「うみべ」で取り上げようと考えている文学者との共通点が多い。新美南吉はアンデルセンのようになりたいと思っていたが、いわさきちひろも深い思い入れを持っており、初期からアンデルセン作品を描いている。1963年にはアンデルセンの育ったデンマークのオーデンセを母とともに訪ねている。宮沢賢治の花や木にまつわる童話を取り上げた「花の童話集」を1969年に制作・発表。自然を観察し心を寄り添わせる文学のルーツとも考えられる万葉集に関して、「万葉のうた」を1970年に制作・発表している。

3 ゆかりの土地

・越前市武生……出生地。母・岩崎文江が女学校の教師として赴任していた場所。母・文江は、松本に生まれ、女子教育の最高学府、奈良高等師範学校で学ぶ。武生に出来たばかりの武生町立実科高等女学校に博物（理科）・家事の教師として赴任。たちまち女学生のあこがれの的となる。責任感が強く、赴任3年目以降は寄宿舎の舎監も務める。結婚後も武生に単身赴任し、教壇に立ち続ける。ちひろを出産（12月）し、学年末、シベリアに出征していた夫の帰国に合わせて、東京へ引っ越す。引っ越しの時には、文江の功績をたたえて武生町長から感謝状が贈られ、学生たちはみな涙で見送った。いわさきちひろ自身も後年、母とともにこの生まれた町を訪ねている。現在、「ちひろの生まれた家」記念館がある。

・松川村……長野の北部、松本市・安曇野市の北に位置する。母・文江と軍の建築技師だった父・倉科正勝は、戦後、開拓農民としてこの地に移住する。いわさきちひろは、信州が好きで、何度も訪ねている。現在、「安曇野ちひろ美術館」がある。

・信濃町……長野の北部、新潟との県境に位置する村。1966年にアトリエを兼ねた山荘を黒姫高原に建てる。以降は毎年この地で絵本を制作した。宮沢賢治の花や草木にまつわる童話を集めた「花の童話集」、万葉集から150首の秀歌を紹介した「万葉のうた」は黒姫で描かれた。現在、アトリエは移設され、「いわさきちひろ黒姫山荘」として黒姫童話館で公開されている。

・東京都練馬区下石神井……東京の自宅があった場所。現在、「ちひろ美術館・東京」として、いわさきちひろの作品を公開している。

4 参考文献や資料など

・出版物や展覧会図録などは多数あるので、特筆しない。2024 年はいわさきちひろの没後 50 年で、「安曇野ちひろ美術館」「ちひろ美術館・東京」では、特別展示がされている。テーマは「あそび」「自然」「平和」。なかでも自然をテーマにした「あれ これ いのち」(安曇野=9/7~12/1、東京=すでに終了)は、身近な自然の大切さをいわさきちひろの仕事を通して考える内容で、遠方でも訪ねる価値のある展示と考えている。

<本の制作と販売について>

・本について知っておくべき基本事項。

- ・並製本と上製本
- ・奥付に書かれていること
- ・オフセット印刷とオンデマンド印刷
- ・本一冊の価格のおおまかな内訳
- ・出版社—取次—書店の流れ

・本を作って売るときを考えると、「どうやって本屋にたくさん置いてもらうか」を考えるのではなく、「潜在的にその本を必要としている人に、どうやって適切に届けるか」を考える。

・「売れるから」を作る理由の第一にしない。出版社の理念に適った内容であるかどうか、必ず考えた上で、作るかどうかを決定する。

[考えてみる]

- ・販売場所、販売方法
- ・見込みの販売冊数
- ・制作資金の捻出方法

↓

刷部数は？

かかる製作費は？（印刷代、依頼費、その他の費用）

↓

利益を見越した一冊の価格は？